短 報

乳腺アポクリン癌の1例

高知県立安芸病院臨床検査科¹⁾, 高知医科大学第2病理学教室²⁾氏原 明子¹⁾ 園部 宏²⁾ 中尾 健¹⁾ 真辺 俊一²⁾大拙 祐治²⁾

I. はじめに

乳腺アポクリン癌は、癌細胞がアポクリン化生細胞に類似する形態を示す特殊型乳癌の一型である¹⁾。本邦での発生頻度は全乳癌の0.1~0.2%とさきわめて低く¹⁾、細胞学的所見に関する報告も数少ない^{2,3)}。最近経験したまれな本腫瘍の穿刺吸引細胞診の1例を経験したので報告する。

II. 症 例

患者は69歳の女性で、左乳房腫瘍に気づき、平成6年10月23日に当院外科を受診した。触診でE領域に2.5×1cm大、弾性硬、境界不明瞭な腫瘍を認めた。悪性を疑い、穿刺吸引細胞診を行い、ClassV(アポクリン癌の疑い)と判定された。11月2日に生検のために病変の一部(拇指頭大)が切除され、組織学的にアポクリン癌と診断された。本人が乳房温存療法を希望して転院した。その後の詳細は不明である。

III. 細胞学的所見

出血ないし壊死物を背景に、少数ながら重積性に乏

A case of apocrine carcinoma of the breast

Akiko UJIHARA¹⁾, M.T., Hiroshi SONOBE²⁾, M.D., Takeshi NAKAO¹⁾, C.T., J.S.C., Shunichi MANABA²⁾, C.T., I.A.C., Yuji OHTSUKI²⁾, M.D.

¹⁾Department of Clinical Laboratory, Kochi Prefectural Aki General Hospital

²⁾Department of Pathology, Kochi Medical School

論文別刷請求先 ☎ 784 安芸市宝永町1の32 氏原明子

平成8年12月13日受付

平成9年4月11日受理

しくシート状に配列する多角形ないし類円形の腫瘍細胞が大小の集塊状ないし散在性に認められた(写真1a)。核は類円形で大小不同性を示し、クロマチンは増量し、明瞭な核小体が1~数個みられた。豊富な胞体はライトグリーンに好染し、多数の好酸性顆粒を有するものが多く(写真1b)、ClassVと判定し、アポクリン癌を疑った。

写真1 本腫瘍の穿刺吸引細胞像。a: 腫瘍細胞は集塊ないし散在性にみられる。b: 腫瘍細胞は明瞭な核小体(矢印)、豊富で微細顆粒状の胞体を示す(パパンニコロー染色)

写真2 本腫瘍の組織および免疫組織所見。a: 腫瘍細胞の管内性増殖部で、明らかなアポクリン分泌像(矢印)をみる(ヘマトキシリン・エオジン染色), b: p53は腫瘍細胞の核に陽性であり, c: e-erbB-2は細胞膜に陽性である(アビジン・ビオチン法)

IV. 組織学的および免疫組織化学的所見

立方状ないし多角形の腫瘍細胞は、明瞭な核小体を示す類円形の異型核を有し、好酸性微細顆粒状の豊かな細胞質をもち、管内性に大小の充実性胞巣状ないし腺管様構造を呈して増殖し、所々で腺腔表面に明らかなアポクリン分泌像を示した(写真2a)。核分裂像や小壊死巣も散見された。一部で明らかな間質浸潤を呈したが、脈管侵襲や脂肪内浸潤はみられなかった。尚、胞体内好酸性顆粒はPAS反応陽性(ジアスターゼ抵抗性)であった。以上からアポクリン癌と診断した。

免疫組織化学的にp53, c-erbB-2, Rbおよびcyclin D1抗原に対する各抗体を用いてアビジン・ビオチン法により、癌細胞における発現性を検討した。約20%の癌細胞の核にp53とcyclin D1が陽性で(写真2b)、一部の癌胞巣では癌細胞の細胞膜に一致してc-erbB-2が陽性であった(写真2c)。Rbは陰

性であった。

V. 考 察

アポクリン癌は、細胞学的に比較的重積性と結合性に乏しい細胞集塊として出現し、個々の細胞境界は不明瞭である。N/C比は小さく、核は顕著な異型性および大小不同性を示し、豊富な胞体内に多数のアポクリン顆粒を認めるのが特徴的である。通常型乳管癌では時に胞体内にアポクリン顆粒を認め、アポクリン癌との鑑別を要するが、この場合はそのような細胞の出現は一部にとどまる。すでに述べたように、自験例は組織学的に乳管癌の部分のない典型的なアポクリン癌であった。穿刺吸引細胞診でも癌細胞の核異型が高度で多数の好酸性顆粒をもち、アポクリン癌を疑ったが、顆粒のごく少ないものも混在し、実際にはアポクリン化生を伴う乳管癌との鑑別に苦慮した。しかし、詳細に再検討すると、数に差はあれ、ほとんどすべての癌細胞が特徴的な顆粒を有していることが確認できた。これまでに指摘されているように、本腫瘍の細胞学的診断(組織型の推定)には癌細胞がきわめて高率にアポクリン化生細胞としての特徴を有していることが重要と思われた^{2,3)}。

今回、採取細胞量が少なく細胞診材料では検討ができなかったが、生検組織を用いた免疫組織化学的検討によりp53, c-erbB-2, およびcyclin D1抗原の発現が証明された。これらの所見は乳癌では予後不良を示唆するとの見解がある⁴⁾が、アポクリン癌に焦点を当てた検討はまだ十分とはいえず、今後の症例の集積が待たれる。

文 献

- 1) 秋山 太. I. 上皮性腫瘍(悪性), アポクリン癌, 坂本吾偉編, 取扱い規約に沿った腫瘍鑑別アトラス「乳腺」, 東京: 文光堂, 1992: 62~64.
- 2) 池永素子. IV. 細胞診, C. 穿刺吸引細胞診(悪性), アポクリン癌, 坂本吾偉編, 取扱い規約に沿った腫瘍鑑別アトラス「乳腺」, 東京: 文光堂, 1992: 167~168.
- 3) 佐藤隆夫, 今野元博, 宇野重利, 西 一典, 寺村一裕, 橋本重夫. 乳腺アポクリン癌の1例, 日臨細胞誌 1993; 32: 422~428.
- 4) 津田 均. 第2部分分子生物学の病理診断への応用, B. 病理・病態診断への将来の展望, 1. 腫瘍および類似疾患, 7) 乳癌, 病理診断と分子生物学・遺伝学, 東京: 文光堂, 1996: 157~160.